



堀、小、だより

夏休み号

発行責任者：校長 渡瀬 穂介

「やさしい日本語」

～伝えたいことをより分かりやすく伝えるために～

副校長 佐々木 光治

現在、日本に住む外国人は約270万人、50人に1人といわれています。さらに、東京オリンピック・パラリンピックに向け、日本を訪れる外国人も増え続けています。その中には、日本語に不慣れな人もいるでしょう。では、その人たちと意思の疎通を上手に図るにはどうすればよいでしょうか。例えば、災害時に必要な情報を伝える時、彼らの母国語を話すことが最も有効ですが、国籍や使用している言語が多様な人々に、情報を正しく伝えることはとても難しく、時間もかかります。そこで、減災のために災害発生時の情報伝達に使う言葉を、誰にでもわかりやすく、簡潔なものにしようとして考案された「やさしい日本語」というものがあります。

その研究をすすめているある大学で、来日一年以内の留学生を対象に災害を想定して行った実験では、「落下物に備えて頭部を保護してください」と伝えたところ、この言葉を理解できた人は全体のおよそ10%だったのに対し、「危ないので帽子をかぶってください」と伝えると、95%の人が理解できたとの結果が出ています。伝え方を工夫し、難しい言い方を避けるだけで、日本語でも多くの人に的確に情報を伝えることができるということが分かりました。そのため「やさしい日本語」は減災の場面だけではなく、様々な場で注目されています。

この「やさしい日本語」をお子様とのコミュニケーションに置き換えてみます。何かを伝えたい時、子どもがまだ知らないような難しい表現を使ってしまったり早口になってしまったり

といった理由で、伝えたい意図がきちんと伝わらないことがあります。そうならないためのポイントになってくるのが「やさしい日本語」です。伝える側である親が、子どもの発達段階に応じて、また様々な状況や場面に合わせて伝える工夫をすることが必要になります。

ここで叱り方について考えてみます。注意をするときに「ダメでしょ」と言いたくなる時は、「何をしているの？」と言い換えて伝えることで、子どもは冷静に自分の行動を振り返りやすくなります。行動を禁止する時は「やめなさい」と言うよりも、「危ないよ」などと、やめなければいけない理由を端的に伝えることが大切です。その他にも「ちゃんとしなさい」より「どうしたらいいかな?」、「これ言うの何回目?」より「前のこと覚えてる?」などと言葉を変えたり、視点をチェンジして伝えたりすることが効果的な叱り方であると、最近読んだ本に書いてありました。このような誰にでも理解しやすい言葉掛けが「やさしい日本語」であり、言葉のユニバーサル・デザインともいえるのです。

これから夏休みが始まります。およそ一ヶ月にわたるこの期間にお子様と関わる中で、分かりやすく伝わりやすい具体的な褒め方や叱り方を工夫し、より良いコミュニケーションを図つていただければと思います。そして、この夏休みが、普段の生活では味わうことのできない楽しい思い出をつくったり様々な体験をしたりすることで、一人一人の児童が大きく成長できる有意義なものになることを願っています。